

今日のおき日に、関西福祉大学 学位記授与式を迎えられた卒業生の皆さん、そして保護者の皆さま、まことにおめでとうございます。心よりお祝いを申し上げます。皆さん方一人ひとりが、こうして卒業を迎えられたことを、共に喜び合いたいと思います。

それと共に、皆さんは本学での学園生活の半分を、コロナ禍のもとで過ごされました。しかしその経験が、今後の皆さんの人生にとって、何かの生きた働きとなって帰ってくることを、また願わずにはおれません。通常とは異なる環境で大学生活を送られた皆さん方の未来を、想わずにおれない気持ちがわいてまいります。

皆さん方の「未来」がどうなるのか、今、知ることは出来ません。けれども、自分の未来は、自分のことだけ考えていても拓（ひら）けていかないのは、確かなようです。

流行語大賞というイベントがあります。今や年末の風物詩になりました。新語や流行語が取り上げられるので、皆さんにも馴染みが深い話題だと思います。去年ノミネートされた中に「SDGs (エス・ディー・ジーズ)」という言葉が選ばれていました。皆さんご承知の用語だと思いますが、これは平たく言えば、社会や地球といった観点から、私たちの未来を心配する言葉です。また私たちの未来に、希望を託そうとする言葉でもあります。「SDGs」は、特に気候変動とか環境危機の問題と関わってよく使われますが、当然ながら皆さん方それぞれの未来とも、大きく関わってくる事柄です。そういう言葉が流行語になったのは、社会や地球の未来がそれだけ大きな問題であり、その未来をしっかりと考えないといけない、ということだと今更ながら思われます。

ある新聞のコラムで、人類学者の長谷川眞理子さんが、学者の立場から少々怖くなるような警告をしておられました。「絶滅危惧種（ぜつめつきぐしゅ）」という用語があります。開発などによる環境改変によって、ある種類の生物が絶滅しかけていることを訴える言葉です。すでに絶滅してしまった生物もたくさんあります。ご承知のように、これを「種の絶滅」と言います。

環境危機の問題が色々と叫ばれますが、長谷川さんによれば、その中で地味に見えるけれども非常に重要なのが、この「種の絶滅」なのだそうです。「地球上で種の絶滅が、すごい速さで進んでいるにもかかわらず、その危険性については、まだまだ一般社会では重要視されていない。それは、見知らぬ虫やら植物がいなくなっても、それが人に害を及ぼすことのようにはなかなか感じられないからだ」と、長谷川さんは述べています。

では一体、何が怖いのか。長谷川さんは続けます。「名前も知らないクモやコケが絶滅してもそれが何だと言いつつ、種の絶滅を続けていくと、自然界のバランスは、あるところでがらっと変わる。要するに、実害が感じられるようになった時には、私たち人類を含めて全員がおしまいだ、ということなるのだけれど、それを想像することは難しい」と指摘されるのです。つまり、自分の回りから知らないうちに虫や植物がいなくなると、何かおかしいぞと地球環境の異変を感じた時には、もう遅いということです。そしてその時が、いつどのような形でやってくるのか分からないことが、一層に怖いのだと長谷川さんは警告しているのでしょう。

卒業生の皆さん方は、本学において専門的な知見とスキルを修められました。それと共に本学では、系列校も含めた全体で大切にしてきた教育精神があります。ひと言にすれば「心の学び」とも言えるものですが、それは一つには、自

分のことだけでなく、人もまた大切にするという心です。そして人を大切にすることは、社会や地球を大切にする心にもつながるはずです。土台は、自分だけでなく人もまた同様に大切にできる心、ではないでしょうか。

そのこともまた忘れずに、自分自身の未来だけでなく、社会や地球の未来も切り拓（ひら）けるような人として、ここからの人生を歩んで頂きたいと心から願っています。

皆さん方のここからの未来に思いを向けつつ、今、感じさせられていることを申し述べて、本学を巣立つ皆さんを送る言葉といたします。